

B O O K

「薬が効かない！」

最初にこの書評の依頼を受けた際、私の父親とあまり年齢の変らない筆者の著書について批評をするのは躊躇されたが、同じく感染症の研究に携わる者として私なりの率直な感想を述べさせていただければとお引き受けすることにした。

「薬が効かない！」というタイトルから、本書が薬剤耐性菌の増加が問題となっている現状を解説しているであろうことは、誰にも容易に想像がつくであろう。その通り、序章の「今や周りは耐性菌だらけ」というテーマに始まる解説は、“耐性菌製造の責任者たち”として抗生物質の乱用に関わった医師や企業を糾弾し、それに続いて、“増大する感染症の危機”の項では、新興・再興感染症の脅威が強調されている。序章を読み終わった時点では、さまざまな批判が展開され、危機を大げさに煽るような最近ありがちな本なのだろうか、と、書評を引き受けたことを正直いって後悔した。ましてや本の帯についている、“ご用心！今や風邪をこじらせただけで死ぬ時代”という文章はショッキングであり、一般の方がこの文章をどう受けとめるかを考えると頭が痛くなった。

やや重たい気持ちで読み始めたが、その後読み進めていくにつれ、まるで微生物学の系統講義を受けているような感覚にとらわれた。すなわち、第1章の“抗生物質はどう神通力を失ってきたか”では抗菌薬開発の歴史に始まって、MRSA、PRSP、多剤耐性結核菌の出現、常在細菌叢の役割、術後感染、バイオテロなど、幅広い領域にわたって解説がなされている。第2章“抗生物質はいかにして細菌を抑えるか”では微生物の基礎知識に始まり、抗菌薬の作用機序、副作用、消毒薬などについても触れられている。これらの内容からわかるとおり、本書は薬剤耐性にとどまらず微生物全般に渡って幅広いテーマで解説がなされており、これから微生物学を学ぶ私の大学の医学生向けに推薦図書として指定したいと思ったくらいである。

後半の第3章に入ると、薬剤耐性のメカニズムや、耐性を獲得する仕組みなどを含めて、薬剤耐性に関する一般的な解説がなされている。さらに本書は抗菌グッズの弊害について、筆者の強い主張を反映して多くの頁を割いて解説がなされている。私自身は抗菌グッズの領域については不勉強であったため、素人の方とほぼ同じ立場で読ませていただいたが、いろいろな面で問題を抱えていることを教えていただいた。なお本書は単なる批判だけに終止しているわけではない。第4章の“では、これからどうしたらいいか”においては、筆者なりのこれから取るべき対策を、国や個人の場合に分けて意見が述べられている。“もっと感染症研究にお金を！”など、私も切に願うことを述べていただいていることは、筆者と同じく感染症の研究に携わる者としてありがたかった。

おそらく本書は、耐性菌の問題を身近に感じる筆者が、このままでは放っておけないという義務感に駆られたことが、書く原動力になったのであろうと思われる。そのため広く警告を出して今のうちに注意を促しておきたいという止むに止まれぬ筆者の気持ちがひしひしと伝わってくるようである。ただその思いが強いあまり、一部に誤解を生じかねない強すぎる表現があるのも事実である。

筆者もあとがきで述べているとおり、正確さと平易さはなかなか両立できない。これだけ広範囲の内容をこの一冊にまとめることができたこと自体賞賛されるべきなのかもしれない。予備知識のない一般の方にはかなり難しい内容も含まれているが、この領域に何らかの関連があって興味を持っておられる方々には、微生物学の系統講義を受けるとともに、さらに筆者とお酒を酌み交わしながら辛口の意見を拝聴しているような気分にさせる一冊である。

東京医科大学微生物学講座 主任教授

松本哲哉

発行：株式会社文藝春秋 〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町 3-23
(電話：03-3265-1211(代表)) 定価：本体 680 円 + 税